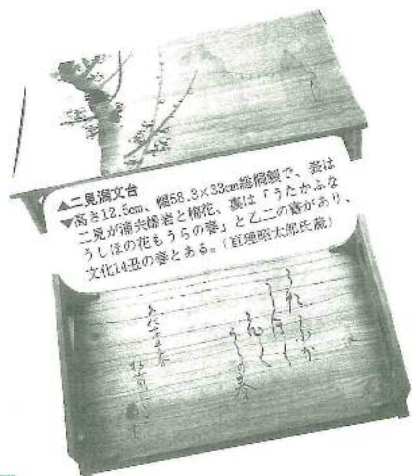


世をそむく世の門出せん月今宵、乙二



万葉人名新収の乙二法印像



▲二島海文舎  
▼高さ12.5cm、幅58.3×33cm縮刷製で、表は二島が浦六郎と梅花、裏は「うたかふなうしほの花もうらの夢」と乙二の書があり、文化44型の書とある。(直理昭太郎氏蔵)

彼の生涯は旅に始まり旅に終わった

漂泊の俳人 松窓乙二

今から約七十年前、江戸文化が最も華開いた文化文政時代に、東北の俳人中で第一人者といわれた人物が世を去った。白石の亘理町に生まれ、谷口与謝(蕪村)、「後世の俳諧この人より起る」とまで言われた松窓乙二である。松尾芭蕉をよなく慕い、芭蕉が「おくのほそ道」を旅したように諸國を行脚した乙二。今月は、市民文芸の年度賞を新しく設けたことを記念して、白石が生んだ偉大な文芸家・松窓乙二の生涯を辿ってみようと思う。

俳句との出会い

松窓乙二は今から二百三十七年前の宝暦五年(一七五五)、亘理町にあった千手院という修験の家に生まれた。修験というものは、山にこもって修行をして不思議な霊力を身につけた者という。亘理三山の山伏がほら貝を吹く姿を想像すればわかりやすい。彼らは自宅に折禰所をつくる祈禱を仕事にしていた。また他の地域に修行に行くことも多いので、城主からスパイのような情報収集活動を命じられてもいたのである。

山千手院といつて四十あまりの修験場の頭としてかなりの羽振りをきかせていた。白石に移るきっかけは、亘理郡の城主が片倉小十郎(清盛)であったことである。清盛が慶長七年に白石城に移ったとき、初代清昭は招かれて白石城下の鬼門の方角に千手院を移した。今の亘理南科医院のある場所で、ご当主亘理昭太郎氏は初代から数えて十三代にあたる。

そして旅へ……

乙二の最初の旅は、本山である京都の室議院での修行のためであった。時は蕪村が白石に泊まった二か月後のことである。行きは東海道、帰りは中仙道の行程は、俳句修行でもあったに違いない。そして天明三年(一七八五)、ついに乙二をもって生まれた才能が華開いた。蕪村七郎某の一つ「五車反古」に彼の句が入選したのである。そのとき乙二は三十歳。

鎌水の俊恵が寺の藤ざめ哉 乙二

この入選を境に乙二は江戸の俳人たちとの交流を盛んに行うようになる。この時代で一流の俳人として全国に名を知ら

まり似つかわしくない俳諧の道に進むようになったのはなぜであろうか、恐らくそれは父・清盛の影響が大きかったであろう。清盛は隣で舎友を俳名とした俳人であり、八代小十郎村典は停吟庵鬼子と号し、芭蕉を師として仰いでいたほどの人物である。乙二もこの父の血を受け継ぐとともに、父から厳しい指導を受けた。後になって弟子の布席が「師わかかりしより、唐に大和の歌をよく味わい古事古語にもくわしく物語ぶみにも眼をさらして、あわれ尋常の俳諧者流のあそび所を傑出したる。我の中の誰のごとくなるべし」と書き残しているように、古事記・日本書記・古今集・山家集などの古典を愛読していたようである。

最初に俳句を作ったのがいつの頃かはわからないが、乙二が十七歳のとき、千代の数員まいらせ伊勢の蘆 (種とは海魚や貝を取ることを案とする者のこと) の句を獲して。また、谷口蕪村の奥村遺墨のことを書いた「新花摘」によるものと、彼が松島天懸の雲光から大きな理もれ木をもらい、安永六年(一七七七)五月、白石に泊まったとき、あまりの重さに処置に困ってこれを菅屋に獲していったという話が出てくる。あるいはこの時に白石城主の息子や妻羅にも会い、二十三歳の若い乙二の句なども見たのであろうか。とにかく、蕪村の米白は彼に大きな影響を与えたはずである。このように、乙二は俳句を目指すには恵まれた環境の中で青年時代を過ごしたのである。

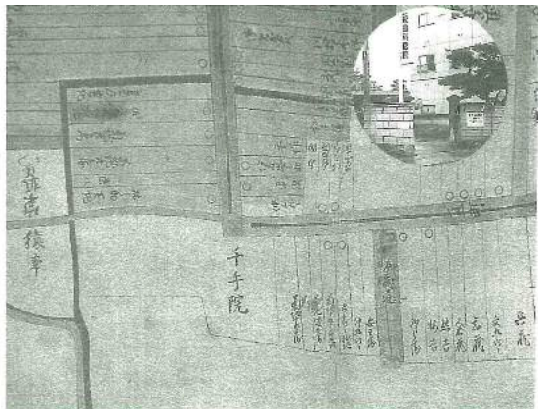


乙二の自筆の書と自画像

れた夏目漱石のもとに五十日も滞在したことが分かっているが、これなどは乙二が江戸文芸界でも一目も二目も置かれる存在に成長していたことを物語っている。

乙二の旅が頓挫になったのは、享和末から文化の始めにかけての頃からのものである。この頃彼は五十歳前後で、当時の平均年齢からすれば老境に入る年であ

る。初めて越後に旅立ったのはいつの頃かは不明だが、文化四年(一八〇七)四月には白石の庵を出発し、小坂峠越えをして米沢領内に入り、小国から羽越の境を越えて越後に出たことが分かっている。乙二は越後から帰ってすぐ今度には京都(一石守屋)に旅立つ。このように彼は自宅にいる間もなく西へ東へと足をの



安政3年の白石城下絵図 千手院に亘理町から登山越までの敷地を写している



乙二の句碑（昭和2年建立）  
「鶯などはとしよるものを春の山」

陣場山の巨理家代々墓所（後の小本がある上まじゅうが乙二の墓）

あり、自らも松前から昆布船に乗って長崎に行ってみようかと思っていたこともあって、三月下旬に旅に出た。第一次とはまったく違うコースを選び、白石から七ヶ宿街道を歩き、金山峠から上山、新庄、秋田、碓ヶ関に着いた。碓ヶ関の関所で関守と問答している記録がある。「仙台の松窓とは医者か、それとも俺と同じく世を捨てた者か」との問いは、「いいえ、私は鑿山伏の類ではなく常の山伏で、芭蕉翁の流れをくんで松窓とは違号です」と答えると、「日も傾いてきたのでこの駅舎に泊まっていたらどうだ」と言われて、丁重に断って通過していったという。

碓ヶ関を通過した乙二は、弘前・青森を経て、八月十五日前後に函館に入港。午後二時ごろに門弟・菊池の家に着いた。翌年乙二を慕って函館に来て病死した蕉

しかし旅心はおさまらず、夏になると北陸道を経て中国地方への旅を計画して越後に出たが、水原で発病し迎えにきた息子の十竹に介護されて白石に帰った。その後、病床にすることが多くをり、ついに文政六年（一八二二）七月九日、六十九歳でこの世を去った。ちょうどこの年は、火災で焼けた白石城大橋（三階櫓）が完成した年に当たる。乙二の遺体は伊達政宗の陣場跡がある陣場山の代々墓所に葬られた。修験は墓標を建てない習わしとなっており、父・麦雅の墓の隣に静かに眠っている。そばには「鶯などはとしよるものを春の山」の句碑が、これも乙二の中で乙二を歌っているかのようだ。乙二は生涯で約二千あまりの句をのこし、東北の各地域に無数の門人を育て、東北文化の発展に偉大な足跡を残して世を去った。しかし乙二の俳句に賭ける情熱は脈々と今に受け継がれ、現在の文化隆盛の源になったのである。

平成3年度市民文芸年度賞作品及び作者

- |   |  |  |   |   |   |
|---|--|--|---|---|---|
| <p><b>敬壇</b></p> <p>この肩にかごを背負いて幾春秋<br/>葉たばこ作る木の葉集めぬ</p> <p>山田 漢</p> | <p>受持の生徒の名簿にかなしくも<br/>黒丸多く戦いに死す</p> <p>大野 兼三</p> | <p><b>俳壇</b></p> <p>売る品も世も様変わりして細々と<br/>履物商い五十年過ぐ</p> <p>佐藤 ひで</p> | <p>里神楽終えて祓ひの御神酒かな<br/>三浦 愛嗣</p> <p>若桑 けんじ</p> | <p><b>柳壇</b></p> <p>死神をゲートボールで追い払い<br/>釣りし鮎青葉城主に献上す</p> <p>近江 孫太郎</p> | <p>舞扇として余韻をかみしめる<br/>日曆に毎日余命はかされる</p> <p>米沢 礼子</p> <p>佐藤 武雄</p> |
|---|--|--|---|---|---|

(敬称略)



乙二二度の蝦夷地行 概要図

二度の蝦夷地行

一口シリア人やアイヌ人と  
初めて会う

その難行の頂点ともいえる旅が、二回にわたった蝦夷地（北海道）への旅である。一回目は文化七年（一八一〇）、乙二五十六歳のときである。六月二十二日、乙二は弟子の真柄太右衛門（福岡下原の真柄家）を伴って白石を出発し、恐らく奥州街道を北上して中秋の頃に盛岡に着いた。盛岡の平野平海のもとにしばらく滞在し、八月二十日ここを立ち、野辺地を経て九月五日本州の最北端・大間浜に到着した。

大間浜で函館への給待ちのために十二日間足止めをくった。そのときに福つきの一夜になりぬ酒の味とうたった。大間浜から船で函館に向かい、十三日函館に入港した。乙二は右席らの歓待を受けて、冬には高き寺の境内に仮すまいを設け「斧の柄」と名づけた。折る柴のなほ細かれや炉の煙はこの時の句である。翌八年二月、海路で松前に行き六月末ごろの函館に帰る。この頃ロシア人ゴロニンら六人が国後に漂着したのを函館まで連れていかれるのを見て、

かまきりの手あしよ髪は古髪  
と乙二は感想を句で表している。恐らく初めて目にしたロシア人だったのだろう。

彼の驚き分かっておもしろい。九年になり乙二は函館で脚の病気に悩まされた。白石に帰って来た太右衛門が函館に駆けつけ、翌年松前から津軽の鯉ヶ沢に上陸して、弘前・青森を過ぎ、見残した宇曾利山（恐山）に行き、南部を回って文化十年（一八一三）八月半ばに白石に着いた。これが第一次の蝦夷地旅行である。

この旅の中で乙二は、三百語に及ぶアイヌ語を取録している。彼は句集「をののえ」の中で、「数百里を隔てて所々にあるので、鳥獸草木等の呼び名は大いに違うという。ここに書き置けたのが全て正しいわけではない」とこわって紹介している。彼が取録したアイヌ語を少し列挙してみよう。

男子（ヤルヘ） 女子（ソヘリ）  
鯉（アチャホ） 月（クンネチユフ）  
風（レイラ） 袖（カムイ）  
一（シネツ） 八（シシヤム）  
山（キタ） 橋（ハリカ）  
またアイヌ言葉の俳句も作った。鯉のつらにもそつとそつと波これなどは、乙二が単に俳諧の修行だけでなく、あらゆるものに興味を抱き記録しておこうという研究者としての一面をうかがい知ることができる。

旅また旅の生活

第二次の旅行は、第一次の旅から帰って六年目の文政元年（一八一八）、乙二が六十三歳の時である。函館の斧の柄社中からの再度来てほしいと何回も要請が